

## はじめに

凍てつく風の吹く日でも、穏やかな日溜りに花満ちあふれ、時が動きを止めてしまったような場所を、人びとは憧れ、羨望を込めて桃源郷と呼ぶ。

隠れ里としての桃花源は、神仙が棲むという人跡未踏の山中深くにあるのではなく、住みがたい現世からの脱離への願いが、見果てぬ夢として、人びとの心の内に醸し出したものに過ぎない。都市に住まう人びとが、辺境の地にそこはかとなき慕情を抱き、旅に誘われるのも、そのような心性によるからだろうか。

引き替え、「匿名社会」や「生き馬の目を抜く」という言葉には、都市社会に潜む陥穽や殺伐とした情景をイメージさせる。わけても神奈川県川崎市には、京浜工業地帯の枢要という地理的条件から、工場や倉庫群といった、無機質で金属的な響きがつきまとう。

だが、市の西北部に位置する麻生区辺りは、起伏に富み、緑も残された新興住宅地の拡がりが見られる。そしてそこには、隠れ里のように、「飛地」として岡上地区という集落がある。周囲は東京都町田市や横浜市青葉区に取り囲まれた、行政的には陸の中の島と言うべき地域社会である。

本書が主題とする「岡上」は、川崎市にイメージされる工業都市とは趣を異にし、桃源郷とは言えないにしても、昔ながらの慣行や田園風景を色濃く残している。

この地とかかわるようになって既に三十有余年が過ぎたが、この間は戦後史の転換点となつた六〇年安保から七〇年安保を経た動乱の時代であり、また大学紛争が全国的に吹き荒れた。その余燼は、この地に所在した大学では後年まで尾を引いた。

本書は、そのような時代状況の中での、変貌しつつあった地域社会との出会いの記録であり、地域の「語り部」たちの魂の紀伝史とも言えようか。

したがって、この書に込められているのは、己の問いかけに対して、虚心に応えてくれた「語り部」の汚れ無き心である。だが時の移ろいは、これらの人びとの何人かを鬼籍に追いやった。ありし日を偲びつつ、黙して瞑する。

本書を彩るのは、当然のことながら「語り部」を含めた岡上という地域社会の生活誌である。だがそこには、不協和音のように国家の影が常につきまとう。岡上が、決して桃源郷たり得なかつたのは、この地を行政上の隠れ里にした国家の動向が、人びとの上に影を落としてきたからである。一人一人の生は全体社会と無縁ではなく、時代状況に翻弄される。

それ故に、「村の分教場」を宮野ヒサさんがほのぼのと語る中で、「本土決戦」に話題が及び、梶糸子さんの少女期と「蚕民騒擾録」が重なる。山伏を業としてきた高松三春さんは、その職を国家によつて奪われ、長く軍隊にとられていた露木一男さんや徴用工として軍需工場で寮生活を送つた梶孝男さん・薙沢岩雄さんは、戦争中や敗戦直後の故郷の様子について「そっだつてね」「後になって聞いた」としか答えられなかつた。そして宮野薫さんは、この地の戦没兵士の記録を自らの意志として編んだ。

思えば、己が「語り部」と接した時代も厳しい時代ではあつたが、これらの人びとが生きてきた時代は、遥かに厳しく、まさしく「辛酸をなめる」状況だつたと知る。

岡上との出会いは一九六六年であつた。拡大を続ける首都圏に組み込まれつつあるこの地が、変貌しないはずはない。文中や挿画に登場している建造物や農地の幾つかは既に消えさせた。だが、全体としての景観は未だに多くが健在である。

この書は元々が、職場の刊行物『エスキス』にモノグラフとして記述し始めたものである。一九八七年春のことであつた。そして一九九六年まで続いた後、二〇〇〇年に「今、岡上は」を書き足した。執筆を続けられたのは、幾人かの人びとの厚情や励ましによるものであり、また聞き取りに応じてくれた地域の人びとの協力の賜物である。

加えて、題字と挿画の労を願つた川添修司さんの人柄そのもののような、ほのぼのとした絵柄に惹かれた人びとの眼差しが、己の文章にも向けられたからであつた。

一冊の書物にまとめることになって、本来ならば改めて加筆訂正すべきところ、実際には全面的な書き換えになるため、手を加えるつもりはなかつた。ところが編集者が読みやすさを考え、親切にも章の組み替えを考えてくれたのである。そのため、若干文章を加えることとなつた。

しかし原則的に内容を変更していないために、今では現存しない建造物や氏名や職名なども、執筆当時のままである。巻末に初出年を付すことにより、ご寛恕願う次第である。